

「父が犯した罪」の波紋 — Elizabeth Gaskell のゴシック短編を中心に —

江澤美月

1 はじめに

Elizabeth Gaskell (1810-65) は、1858年ハイデルブルクを旅行中、今日“Right at Last”の題名で知られる短編を執筆している。当初“The Sin of a Father”の題名で *Household Words* に掲載されたこの短編には、¹「父が犯した貨幣偽造の罪」を世間に知られることを恐れるあまり、犯罪者の要求を呑むことも辞さない男が登場する。この短編では「父が犯した罪」の波紋に焦点が当てられており、この罪を主要なテーマとするゴシック小説との共通点を提示している。²

Laura Kranzler は、ゴシック小説の結末が紋切り型かつ道徳的である理由として、この小説形態が禁じられた欲望を引き出す反社会的な衝動を内包していることを挙げているが (2006, 48)、ゴシック小説の典型として引き出されるパターンは、「父が犯した罪」の報いを息子が受けるというものである。例えば、ゴシック小説の先駆的作品である Horace Walpole (1717-97) の *The Castle of Otranto* (1765) において「父が犯した罪」とは、現城主の父親による王位篡奪を意味し、罪の報いは、王位篡奪者の子孫の息子が権力の座から追放されることで完結している。³

しかし「父が犯した罪」が物語の表に立ち現われずに、後景に退いてみえる場合もある。それは「父が犯した罪」の暴力連鎖に、共犯者の存在が認められる時である。William Godwin (1756-1836) の *Caleb Williams (Things as They Are or the Adventures of Caleb Williams)*, 1794 は、その好例であろう。この小説において領主 Falkland が犯した殺人は、別の容疑者の発見によって法制度的には不問に付されており、「父が犯した罪」は表面上隠蔽されている。しかし雇い人 Caleb に事の真相を察知され、さらに自分からの逃亡を企てられたため、Falkland は罪を暴露されることを恐れて執拗な追跡を開始する。

Gaskell は無類のゴシック小説愛好家であったことが知られているが (Kranzler 2004, xi)、“Disappearances” (1851) の中で *Caleb Williams* に言及し、追われる側にある Caleb に、Falkland のプライバシー侵害の側面を見出している。すなわち彼女は、Falkland の追跡は、Caleb の逃亡によって触発されていることから、Caleb が Falkland と共犯関係にあることを示唆していると解釈できるのである。家父長である Falkland による追跡は、雇い人 Caleb にとってその権力関係に照らした場合、暴力といっても過言ではなく、Falkland は殺人という暴力を隠すために、新たな暴力に訴えているといえる。しかしこの新たな暴力を招いたのは、他ならぬ Caleb 自身であったところに、この小説の複雑さがあるのだろう。

Shirley Foster は、Gaskell が暴力について考察したのは主に短編であったとし、その源泉を、18 世紀後半に発しヴィクトリア朝中期に再燃した、英文学におけるゴシックの伝統に求めている (14-15)。Gaskell の暴力に対する視点を、「父が犯した罪」のテーマと関連づけた時、どのような展望が得られるだろうか。本稿では、「父が犯した罪」についてテキスト上直接言及のある二作のゴシック短編 “The Grey Woman” (1861)、“The Poor Clare” (1856) に加え、この罪について直接的な言及はないが、Fred Botting によれば、「父親の過去における罪深い秘密」(127) を主題としている “The Old Nurse’s Story” (1852) を中心に考察する。

2 ギヤスケルの短編における「父が犯した罪」

「父が犯した罪」を考察するにあたり、はじめに「父」の定義を行なう必要が生じるが、この場合の「父」とは、字義通りの意味の他に「家父長」ひいてはその集団の長の意味が含まれている。このことに関し、今回取り上げる “The Grey Woman”, “The Poor Clare”, “The Old Nurse’s Story” は、いずれも共通している。既に述べたように、“The Old Nurse’s Story” では、「父が犯した罪」が暗示されるに留められているので、発表年代とは逆に遡及的に論じることで問題点を明らかにしたい。

はじめに “The Grey Woman” では、表題の名称で呼ばれる Anna の娘 Ursula の婚約破棄にまつわる話として、「父が犯した罪」が提示されている。

[T]he aunt Anna had a sad history. It was all owing to one of those hellish Frenchmen; and her daughter suffered for it - the cousin Ursula, as we all called her when I was a child. To be sure, the good cousin Ursula was his child as well. The sins of the fathers are visited on their children [. . .]. Well, there are papers - a kind of apology the aunt Anna wrote for putting an end to her daughter's engagement - or rather, facts which she revealed, that prevented cousin Ursula from marrying the man she loved; and so she would never have any other good fellow [. . .]. (VII, 303)⁴

Walpole 以来のゴシック小説の伝統にならえば「父が犯した罪」の報いを受けるのは息子であるが、ここでは「父が犯した罪」の報いを娘が受ける図式が提示されている。Anna の娘 Ursula の従兄によれば、Ursula の婚約解消の原因は、彼女の父が犯した殺人に由来する。引用中の“one of those hellish Frenchmen”で示唆されるように、Ursula の父 Monsieur de la Tourelle はフランス人だが、領主を仮の姿とする集団強盗グループの首領であった。さらに事実を告白した母 Anna の手紙によれば、娘の父親が殺害したのは、他ならぬ娘の婚約者の父親であったからである。

先に引用した Ursula の従兄の説明は、「父が犯した罪」の報いを子孫が受けるという、ゴシック小説の伝統を踏襲したという意味では、一応の説得力を持つ。しかし John Geoffrey Sharps が指摘するように、娘の結婚に反対する母親の行動は些か奇妙である (339)。それは手紙の冒頭部分から察せられるように、母はこのような告白をする自分を娘が決して許さないであろうことを十分承知しており、娘の幸せを願わないわけではないと断っているからだ。その上 Ursula は、実の父親の不在によって社会的制裁を受けていたわけではない。⁵ 彼女の社会的地位は養父の存在によって守られていたのであり、その養父が死亡した今となっては、真実を知るものは Anna 一人である。その Anna 自身も、現在死の床に就いているそのような状況下にあつて、もし自分が語らなければ自分の死後は永遠に葬り去られてしまうに違いない夫の罪を、なぜ敢えて、それも死を間近に控えた今になって、娘に暴露する必要があるのだろうか。

書簡の中で Anna は Ursula に“my poor, worse than fatherless, child” (VII, 355)

と呼びかけているので、ここで婚外子を扱ったギヤスケルの作品 *Ruth* (1853) との比較を試みてみたい。この作品において、*Ruth* が息子に婚外子である事実を告白するのは、世間の口さがない噂話で息子を傷つけるよりは、むしろ自ら事実を説明すべきとの配慮の結果だった。しかしこの時彼女は、息子に父親の名を詰問されなかったことに安堵を感じている。彼女は後に一人の医者に真実を教えるが、それはその医者に、チフスに感染した息子の父親を介護する必然性を、納得させるためであった。その時も、他の誰にも明かさないうで欲しいと再三頼み、結果としては息子に知らせることを拒んでいる。仮に *Ursula* が “worse than fatherless, child” であるならば、彼女は *Ruth* の息子 *Leonard* よりも worse であることになるが、娘が父親不在により社会的不利益を蒙ったわけではなく、また娘の要請を受けたわけでもない実の父親の名を告白することへ、*Anna* を導いた動機は一体何だろうか。

こうして考えた時、*Anna* には、夫による殺人、すなわち「父が犯した罪」を憎むことはさることながら、自覚的ではなかったものの、それを助長させた自分自身の罪を悔やむ気持ちが強いことに気づく。「父」たる *Monsieur de la Tourelle* は、*Anna* が聞いているとはつゆ知らず、もし妻が、自分の殺人の秘密を知り逃亡を企てたら殺害すると仲間に公言するが、この時 *Anna* は、「父」である *Falkland* の殺人を知った後逃亡を企てた *Caleb* と、同じ位置に立ってしまったことになる。逃亡する妻を追跡する過程で「父」は、暴力の連鎖を引き起こし、誤って別の女を殺害した。「父」が死罪へと追い込まれた直接の原因は、この女の殺害にあったことから裏付けられるように、この物語における「父が犯した罪」は、法制度的には、娘の婚約者の父親殺害ではないのである。

「父が犯した罪」が妻殺害のために起こった別の女の殺害にあるならば、*Anna* には「父」の犠牲を免れるために別の犠牲者を「父」に差し出したという意味で、つまり「父が犯した罪」の暴力連鎖に加担したという意味で、「父」の共犯者である側面が生まれてくるのではなからうか。*Anna* には自分の身代りに犠牲になった女がもう一人いる。それは小間使いの *Amante* である。隠れ家に閉じこもり外出を拒否した *Anna* との暮らしを支えるため、男装し仕事に出かけた *Amante* は、「父」の手先によって殺害され、*Anna* のもとへ帰ってはこなかったからである。

以上のことから、“The Grey Woman”における母の娘に対する告白と、その結果導かれた娘による婚約破棄は、「父が犯した罪」の報いを娘が受けたとするよりも、むしろ「父」との共犯者であった「母が犯した罪」の報いを、娘が受けたと解釈する見方が成立するのではなかろうか。ここでの「母」は、二人の女の殺害に加担している。また父娘の関係の希薄さに比べ母娘関係が濃厚であることは、Annaによる母系の血筋の強調にもみられる。

It was a girl, as I had prayed for. I had feared lest a boy might have something of the tiger nature of its father; but a girl seemed all my own. (VII, 355)

しかしこれは単に「父が犯した罪」における父息子関係を、「母が犯した罪」における母娘関係へと置き換えているのではない。その差異は罪に対する対処の仕方にある。罪の発覚を恐れ、逃亡した Caleb を追跡し続けた Falkland のように、“The Grey Woman”の「父」は、暴力的に犯した自らの罪を隠すため別の暴力に訴え、暴力の連鎖を招いていった。その一方で「母」の行動は、罪の告白へと向かっている。母は娘への手紙の冒頭で「全てお話します。」と宣言して語り始め、手紙の末尾では自分の行為を“revelation” (VII, 361) と表現して締めくくっているからである。

さらに忘れてはならないのは、母が自分の告白は娘の意志決定に強制力を持つものではないとしている点である。母は自分の本能は娘の結婚を回避することを教えていると述べた直後に、自分の判断が誤っている可能性に言及するが、これは責任放棄ではなく、自分の言葉が強制的に働くこともまた暴力であることを、自覚してのことではなかろうか。

“The Grey Woman”の5年前に発表された“The Poor Clare”は、Bridgetの呪詛の言葉が“innocent”なLucyに、ドッペルゲンガ—的doubleの憑依を招いていることから、超自然現象を扱った物語、魔女物語として論じられる機会が多いが、⁶この物語においてもテキスト上は、「父が犯した罪」の報いを娘が受ける図式が提示されている。“The Grey Woman”において「父が犯した罪」が、娘の

婚約破棄の原因として言及されていることは、既に確認したが、“The Poor Clare”においても「父が犯した罪」は、娘の結婚にとっての障壁として提示されている。しかし、母の告白を尊重し婚約を破棄した“The Grey Woman”の Ursula の場合とは異なり、“The Poor Clare”における Lucy の結婚は成立している。“The Grey Woman”では「父が犯した罪」の暴力連鎖を阻止するために、娘の結婚が自主的に回避されていたが、“The Poor Clare”において「父が犯した罪」は、Lucy の結婚にどのような影響力を及ぼしているのだろうか。

この物語にはテキスト上「父が犯した罪」についての言及が二度みられる。最初は、Lucy の乳母 Mistress Clark によるものであり、その次には、Lucy のもとへ遺産相続権告知のため訪れた弁護士がこの言葉を口にしてしている。まず Lucy の乳母である Mistress Clark は、自分自身には何の咎もない Lucy に double の憑依が起きた原因説明を、「父が犯した罪」の報いに求めている。

“The sins of the fathers shall be visited upon the children,” she [Mistress Clarke] said. (V, 363)

「父が犯した罪」について、Mistress Clark は弁護士に、Lucy の父 Mr. Gisborne が魔法の愛犬を殺害した結果、呪詛を招いたと告げるが、それを聞いた弁護士は、事実はさらに複雑であると応酬する。

The roots of that curse lie deeper than she [Bridget] knows: she [Bridget] unwittingly banned him [Mr. Gisborne] for a deeper guilt than that of killing a dumb beast. The sins of the fathers are indeed visited upon the children. (V, 367)

Mistress Clark から Lucy の母親の名前を聞き事態を確信した弁護士は、彼女が話のなかで言及した魔法は Lucy の祖母 Bridget であること、Lucy の父親が殺害した犬は Bridget の娘、すなわち Lucy の母親 Mary の愛犬であったことを指摘する。彼はさらに Bridget - Mary - Lucy の血縁を示した上で Lucy に、母方の遺産の相続権があることを伝えている。このことから、この物語において

も“*The Grey Woman*”の場合と同じく、母娘関係が父娘関係よりも重要視されていることは明白である。しかし彼はそれでも「母が犯した罪」とは捉えず、*Mistress Clark* 同様「父が犯した罪」のために娘が報いを受けたとの姿勢を崩していない。

“*The Grey Woman*”同様、“*The Poor Clare*”においても「父が犯した罪」は曖昧であり、特にこの作品では、間接的に示唆されるに留められている。弁護士は「父が犯した罪」について言及した時、*Bridget* は意図せずして犬殺害以上の *Mr. Gisborne* の罪を呪ったと述べているので、まずこの意味から考察したい。ここで示唆されている「父が犯した罪」とは、「父」が間接的に *Lucy* の母 *Mary* の殺害に関与していることであろう。既に述べたように、*Lucy* の父 *Mr. Gisborne* が殺害した犬は、*Bridget* の愛犬のみならず *Mary* の愛犬でもあった。この犬は行方不明の娘の帰宅を待ちわびる母 *Bridget* にとって娘の分身的存在であったことから (V, 335-36)、その殺害は、娘自身の殺害と同様の重みを持っていたと言える。犬に仮託された象徴的な死に加え *Mr. Gisborne* は、*Mary* 自身の死にも間接的に関わっている。*Lucy* の乳母 *Mistress Clark* の説明によれば、*Mr. Gisborne* の欺きを確信した *Mary* は、急流に身を任せ死亡しているからである。この時絶望にかられ *Mary* が発作的にとった行動は、男の裏切りを確信した *Ruth* が襲われた行動と酷似している。“*The Poor Clare*”のなかでも *Mary* の結婚は、非公式なものであった可能性が繰り返し示唆されていた。このことから、間接的にのみ語られる「父」による「母」殺害とは、「母」の社会的名誉の失墜であったのかもしれない。

このように考察を進めると、「父が犯した罪」とは「母の殺害／母の社会的死」を意味し、その結果、娘である *Lucy* に邪悪な *double* の憑依が起こったことになる。しかしこの物語では、あたかも *Mary* の非公式な結婚と *Lucy* の連想を拒むがごとく「父が犯した罪」が背景へと退けられ、代わりに *Bridget* が *Lucy* に対する *double* 憑依に直接関与した人物として強調されている。このことは何を意味するのだろうか。

こうした上で、「父」*Mr. Gisborne* による犬の殺害に触発されて彼に呪詛の言葉を投げつけたのは、*Lucy* の祖母 *Bridget* であることを改めて考えてみたい。先程“*The Grey Woman*”を論じた際に、言葉が強制力を伴った場合に暴力性を

帯びる可能性について触れたが、犬の殺害も呪いも共に暴力であるならば、この場合「父」による暴力に触発され暴力の連鎖を引き起こしているのは **Bridget** となる。この意味で **Lucy** の祖「母」**Bridget** は「父」の共犯者であろう。

このように仮定すると、この物語もまた“**The Grey Woman**”同様、「母が犯した罪」の報いを娘が受ける話として解釈できることが分かる。つぎに「母が犯した罪」に目を転じると、**Bridget** もまた「父」同様「**Mary** の殺害／社会的死」に関与していたことが、**Mary** の大陸での奉公に対する **Bridget** の反応から導き出せる。

考察に先立ち **Mary** の大陸行きは、「父」の誘惑を受け社会的な死を迎える可能性が示唆されていたことに注意を向ける必要がある。**Gaskell** の作品では“**The Poor Clare**”(1856)に先行する **Ruth** (1853) や **Mary Barton** (1848) の **Esther** の例で示されるように、保護者なしに未知の土地へ無防備に婚前の娘を送り出すことに伴う性的危険性が繰り返し語られている。この時娘を男の誘惑から保護する重要な使命を帯びているのは母親である。

このことを念頭におくと、母親を残し一人で大陸へ奉公に出た **Mary** には、保護者としての母親の存在が欠落していたことがわかる。大陸では **Mary** に誘惑に晒される危険性を忠告する者が誰もいなかったわけではない。たしかに彼女の奉公先の侯爵夫人は、その結果は **Mary** の感情を害したに過ぎなかったが、彼女から階級が異なる男と結婚を前提とした関係にあると聞くと、即座に警告に踏み切っていた。母親の **Bridget** はどのような反応をみせていただろうか。**Bridget** も侯爵夫人ほど直接的ではないにせよ、**Mary** の手紙によって、階級差のある男と結婚する可能性を知らされていた。しかし彼女は、この時瞬時に危険の可能性を知らせるべく反応していない。その後、音信不通の娘を探しに大陸へ出かけた時も、結婚に関する噂を耳にする機会があったにも関わらず、娘との再会は果たしていない (V, 349)。**Bridget** には一体何が起こっていたのだろうか。

ここでこの親娘の愛憎半ばする関係を指摘したい。大陸の奉公先に勤める意向を示した娘に対し、プライドの高さ故に寂しさを表明できず娘を思い留まらせることが出来なかった **Bridget** は、“we parted unfriends” (V, 348) の言葉から推察されるように、愛情の裏返しとして憎悪を見せ、果ては嫌がる娘を無理やり行かせたとの経緯があった。本文中に繰り返し語られているように、**Bridget** にと

って Mary は、決して憎悪の対象であったのではなく、むしろ絶対的な愛の対象であった。ところが、特に悪意があったわけではないにせよ娘の行方が知れなくなってから捜索に乗り出した Bridget の行動は、Mary に警告した侯爵夫人に代表される当時一般の認識からすれば、かなり遅きに失した感があったことは否めない。すなわち Bridget には、止めようと思えば止めることが出来たかも知れない娘を、無防備に大陸へ送り出したという意味で、また娘から連絡を受けた際に反応せず沈黙したことで、もし彼女にその意思があれば可能であったかも知れない娘の「社会的名誉の喪失／死」を回避する機会を逸し、その結果、娘を「父」Gisborne の犠牲者として差し出してしまった面があったのである。母親に娘を守る使命があったとするならば、娘の保護者たる母親の義務を怠ったという意味で Bridget の沈黙は一種の暴力であり、「母の犯した罪」と解釈できるだろう。

結末部分で死に瀕した Bridget は、自らの“deadly sin” (389-390) を告白することで、はじめて Lucy を呪いから解放することが可能になる。double 憑依の結果 Lucy は社会的に忌避される存在となっていた。そのため呪縛を解くことは、Lucy が結婚も含め社会的に容認される存在となることを意味する。Bridget の告白は、Mary の時には果たせなかった暴力の連鎖を防ぐことに、成功したのである。

今回取り上げた三作の作品のなかで、最も初期に属する“The Old Nurse’s Story”は、“The Grey Woman”や“The Poor Clare”の場合と異なり、テキスト上には「父が犯した罪」への直接的な言及は存在しない。しかし、雪の日に娘親子を戸外へ追放した Lord Furnivall の存在と母娘の姿をした亡霊の出現は、「父が犯した罪」を想起させるに十分であり、亡霊は Furnivall 家の末裔 Rosamond を戸外へ誘い出そうと狙っていることから、「父が犯した罪」の報いを娘が受ける話と解釈出来る。

この物語の顕著な特徴は、「父が犯した罪」の否認が当事者の Miss Furnivall によって為されていることにある。彼女は姉とその娘が父親によって追放された時には沈黙を守っていたが、Rosamond の乳母 Hester から Rosamond を誘惑しようとする母親と娘の姿をした亡霊の話が聞かされると、“forgive!”と父ではな

く、自分の sin を連想させる言葉を叫んでいる。

I told it all to Miss Furnivall, shouting it close to her ear; but when I came to the mention of the other little girl out in the snow, coaxing and tempting her out, and willing her up to the grand and beautiful lady by the holly-tree, she threw her arms up - her old and withered arms - and cried aloud, “Oh! Heaven forgive! Have mercy!” (II, 436)

“Oh, have mercy! Wilt Thou never forgive! It is many a long year ago” - (II, 436)

Miss Furnivall はまた Hester に、Rosamond を戸外へ誘い出そうとした子供の亡霊は、彼女を死に至らしめる邪悪な存在であると警告している。Miss Furnivall は Rosamond の母の従兄の大叔母にあたる。従って “The Grey Woman” において母親の Anna が、娘の結婚を阻止したように、また “The Poor Clare” において Bridget が、孫娘の呪縛を解いたように、Miss Furnivall の行為は一種の告白として機能している可能性がある。Miss Furnivall は “The Poor Clare” で Mary に警告した侯爵夫人のように、Rosamond に降りかかることが予想される新たな暴力の連鎖を、予防的に阻止しようと努めているのではなかろうか。

そのことを裏付けるように、Miss Furnivall の警告は、Rosamond による暴力連鎖の終結へといざなっている。この警告を受けた後 Rosamond の乳母 Hester は、Miss Furnivall がかつて、一人の男の愛情を巡って姉と争い敗れ、姉に復讐を誓ったこと、父に姉の娘の存在を知らせることで父を姉親娘追放へと導き、父の共犯者となったこと、その姉親娘が今は亡霊となっていることを知り、彼女に対し恐怖の念を抱く。しかし Hester は、Rosamond に対するこの Miss Furnivall の警告を聞いていたことから、次第に彼女に対し憐れみを感じるようになり、ついには Rosamond に “a deadly sin” (II, 442) を犯した者のために祈ることを教えるに至るからである。この Rosamond が Furnivall 家の末裔であることは既に述べたが、このこととこの祈りを考え合わせると、祈りによる赦しは、暴力連鎖の終結を最も明白に表現するものであろう。しかし Rosamond の祈りは、常に必ず亡霊の声で中断されてしまい成功していない。

最後に Miss Furnivall が「自らが犯した罪」を自覚し、それまでの沈黙を破ってそれを告白するに至るまでの経緯を辿りたい。Laura Kranzler は“The Old Nurse’s Story”で言及される親娘の亡霊について、Gaskell が *The Life of Charlotte Brontë* (1857) に記述した「ハウースの女の物語」に先行するものとの見解を示している (2004, xxxii)。

Her angry and indignant father shut her up in her room, until he could decide how to act; her elder sisters flouted at and scorned her [. . .]. The tale went, that passers along the high-road at night time saw the mother and young daughter walking in the garden, weeping, long after the household were gone to bed. Nay, more; it was whispered that they walked and wept there still, when Miss Brontë told me the tale - though both had long mouldered in their graves. (*The Life of Charlotte Brontë* 34)⁷

ここに提示されているのは、娘の婚外子出産を受けた家族の反応である。「ハウースの女」は、義理の兄に誘惑され妊娠したかどで、父親の怒りにふれ、自宅に幽閉される。彼女は“The Old Nurse’s Story”と同じく同性の姉妹の同情を失い、死後は娘と共に亡霊となって周囲をさまよっている。「ハウースの女の物語」はまた、M.G. Lewis (1775-1818) の *The Monk* (1796) における尼僧院長を想起させる。この尼僧院長は「父」たる修道院長の批判から自分を守るため、掟を破って恋人と会い妊娠した修道女 Agnes を、秘密裏に監禁しているからだ。しかし「ハウースの女の物語」や *The Monk* と“The Old Nurse’s Story”が異なる点は、声なき犠牲者の嘆き、すなわち、他者の呼びかけに対する応答の仕方にあるのではなかろうか。助けを求める Agnes の叫びに耳をふさいだ *The Monk* の尼僧院長は、その事実が露頭すると、群衆の怒りを買って凄惨な死を遂げた。しかし Gaskell の短編において Miss Furnivall は、Rosamond の耳にのみ届き自分には聞くことの能わない姉と姪の叫びに対し、赦しを求めている。その結果、彼女には、それまで聞こえなかった亡霊たちの声が聞こえるようになる。

“I hear voices!” said she. “I hear terrible screams - I hear my father’s voice!”

(II, 443)

Miss Furnivall の耳に届いている声が、父親の声のみならず複数であることに注目したい。姉の亡霊、姪の亡霊の声が聞こえることではじめて彼女は、子供を折檻する父親の亡霊に容赦を乞うことが可能になるのである。

Just at this moment - when the tall old man, his hair streaming as in the blast of a furnace, was going to strike the little shrinking child - Miss Furnivall, the old woman by my side, cried out, “O father! father! spare the little innocent child!”
(II, 445)

打ちすえられようとする子供を庇い、父親を制止しようとする Miss Furnivall の行動は、直前に為された姉の亡霊の行為、さらに遡れば、生前為された姉の行為の再現でもある。しかしこのことによって、姉に復讐を誓い、姉親子を死へと追いやった Miss Furnivall の罪は償われるわけではない。この物語の結末が示すように、Miss Furnivall は、Macbeth を扇動することで間接的に Duncan 殺害に関与した Macbeth 夫人の悔悟の言葉、“What is done in youth can never be undone in age!” を叫び続ける (II, 445)。そして自分が「父」の共犯者であったことを自覚したが故に、生涯心身ともに苦しみ続けるからだ。しかし彼女の告白によって、Rosamond の母方の遠縁にあたる Miss Furnivall の罪が Rosamond に及ぶこと、すなわち、「母が犯した罪」が娘に報いとして降りかかることは、回避されているのではなかろうか。

3 おわりに

Gaskell は、ゴシック小説の典型的なテーマ「父が犯した罪」の再考を、共犯者の存在に注目することによって果たしている。Walpole をはじめとするゴシック小説の伝統では、「父が犯した罪」の報いを息子が受ける図式が提示されてきた。それに対し、今回取り上げた Gaskell による三作のゴシック短編では、共犯者としての「母」の存在を認めることで、「母が犯した罪」の報いを娘が受ける図式が提示されている。Gaskell の「母が犯した罪」が、「父が犯した罪」と異なる

るのは、父ヴァージョンが罪の隠匿によって暴力の連鎖に傾いているのに対し、母ヴァージョンが罪の告白によって暴力の阻止に傾いている点にある。

この場合暴力とは、単に直接的な身体的危害を意味しているのではなく、言葉による危害も含まれる。中でも今回取り上げた Gaskell の作品で特徴的なのは、沈黙の結果、たとえ明白な悪意がなかったとしても、暴力を行使した場合と同様の効果が生まれるという点である。そのためこの行為に対抗する形で配置される告白が、大きな意味を持つてくるのである。

共犯者としての「母の犯した罪」を認めたことから察せられるように、Gaskell は単に男と女を善悪に振り分けているのではない。それは彼女の第一作 *Mary Barton* を見れば明らかになる。この作品では、Mary の父親の John Barton による、工場主側の急先鋒となった元労働者の息子殺害が存在し、文字通り「父が犯した罪」が提示される。しかしこの「父」は殺人後、自分の要求、主張を暴力に訴えて解決しようとしたことの無力感に苛まされて、被害者の父親に自らの罪の告白をするに至り、本稿で論じた「母が犯した罪」の場合同様、暴力連鎖の回避へと傾いているからだ。また「母が犯した罪」の場合も、暴力連鎖の抑止に努めることが必ずしも手放しの幸福を約束するわけではなく、却って苦痛を伴うものである場合も多いことは、本論で示した通りである。しかし、清算できない過去に果敢に立ち向かう時、僅かながらも生まれる希望に、Gaskell の目は向けられていたのではなかろうか。

ゴシック小説の伝統的テーマ「父が犯した罪」は、罪の隠匿により暴力連鎖を強化させているが、Gaskell は共犯者である「母が犯した罪」に着目し、母に告白させることで暴力連鎖の回避を志向していると解釈できる。

注

本稿は、第 19 回日本ギヤスケル協会例会（2007 年 6 月 2 日、於実践女子学園 渋谷キャンパス）におけるワークショップ、「ギヤスケルの短編 3 作を読む」での発表に基づいている。

1 Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (New York: Farrar Straus

- Giroux, 1993) 453, 662 n.17.
- 2 David Punter, *The Literature of Terror*, vol. 1 (Harlow: Longman, 1996) 46.
 - 3 *The Castle of Otranto* の初版の序文に「父が犯した罪」についての言及“*the sins of fathers are visited on their children to the third and fourth generation*”があることは、よく知られている。Michael Gamer による 2001 年ペンギン版のテキスト註によれば、この記述は旧約聖書の出エジプト記、民数記、申命記に由来するものである。なお the sins of fathers は「父の罪」および「父祖の罪」と訳されることが多いが、本稿では罪を犯す行為に力点をおいているため、「父が犯した罪」とした。Cf. Horace Walpole, *The Castle of Otranto* (London: Penguin, 2001) 6-7, 107 n.13.
 - 4 本稿における Gaskell のテキストは *The Life of Charlotte Brontë* を除き The Knutsford Edition の *The Works of Mrs. Gaskell* (1906) を使用し、以下この版からの引用は、括弧内に巻数とともに頁数を記す。
 - 5 Gaskell の *Ruth* には、母親の非公式な結婚の結果、子供に社会的な不利益が生じることに関する危惧が散見される。
 - 6 Cf. Vanessa D. Dickerson, “Woman Witched: The Supernatural Tales of Elizabeth Gaskell” *Victorian Ghosts in the Noontide: Women Writers and the Supernatural* (Columbia: U of Missouri P, 1996) 103-31.
 - 7 Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (London: Dent, 1966) 34.

Works Cited

- Baldick, Chris. *In Frankenstein's Shadow: Myth, Monstrosity, and Nineteenth-century Writing*. Oxford: Clarendon, 2001.
- Botting, Fred. *Gothic*. London: Routledge, 1996.
- Chapple, J.A.V. and Arthur Pollard, ed. *The Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Dickerson, Vanessa. *Victorian Ghosts in the Noontide: Women Writers and the Supernatural*. Columbia: U of Missouri P, 1996.
- Duthie, Enid L. *The Themes of Elizabeth Gaskell*. London: Macmillan, 1980.
- Foster, Shirley. “Violence and disorder in Elizabeth Gaskell’s short stories.” *Gaskell*

- Society Journal*. 19 (2005): 14-24.
- _____. "Elizabeth Gaskell's shorter pieces" *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Ed. Jill L. Matus. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Gaskell, Elizabeth. "Disappearances." [1851] *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 2. London: Smith, Elder, 1906. 410-421.
- _____. "The Grey Woman." [1861] *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 7. London: Smith, Elder, 1906. 300-361.
- _____. *Mary Barton and Other Tales*. [1848] *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 1. London: Smith, Elder, 1906.
- _____. *The Life of Charlotte Brontë*. [1857] London: Dent, 1966.
- _____. "The Old Nurse's Story." [1852] *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 2. London: Smith, Elder, 1906. 422-445.
- _____. "The Poor Clare." [1856] *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 5. London: Smith, Elder, 1906. 329-390.
- _____. *Ruth*. [1853] *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 3. London: Smith, Elder, 1906.
- _____. "Right at Last." [1858] *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 7. London: Smith, Elder, 1906. 278-299.
- Godwin, William. *Caleb Williams*. [1794] London: Oxford UP, 1970.
- _____. *Things as They Are or the Adventures of Caleb Williams*. [1794] London: Penguin, 2005.
- Gross, Harvey. "The Pursuer and the Pursued: A Study of *Caleb Williams*." *Texas Studies in Literature and Language*. 1 (1959): 401-411.
- Handley, Graham. *An Elizabeth Gaskell Chronology*. New York: Palgrave Macmillan, 2005.
- Hogg, James. *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner*. [1824] Oxford: Oxford UP, 1999.
- Hopkins, Annette B. "Dickens and Mrs. Gaskell." *Huntington Library Quarterly*. 9.4 (1945-46): 357-385.
- Hopkins, A.B. *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work*. New York: Octagon, 1971.
- Hughes, Linda K. and Michael Lund. *Victorian Publishing and Mrs. Gaskell's Work*.

- Charlottesville, U of Virginia, 1999.
- Kranzler, Laura. "Introduction." *Gothic Tales*. London: Penguin, 2004.
- _____. "Gothic themes in Elizabeth Gaskell's fiction." *Gaskell Society Journal*. 20 (2006): 47-59.
- Lewis, Matthew Gregory. *The Monk: A Romance*. [1796] New York: Broadview, 2004.
- Martin, Carol A. "Gaskell's Ghosts: Truths in Disguise." *Studies in the Novel*. 21.1 (1989): 27-40.
- Mighall, Robert. *A Geography of Victorian Gothic Fiction: Mapping History's Nightmares*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Myrone, Martin ed. *The Gothic Reader: A Critical Anthology*. London: Tate, 2006.
- Parkin-Gounelas, Ruth. *Literature and Psychoanalysis: Intertextual Readings*. New York: Palgrave, 2001
- Punter, David. *The Literature of Terror*. Vol. 1. Harlow: Longman, 1996.
- Sharps, John Geoffrey. *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works*. Fontwell: Linden, 1970.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Brighton: Harvester, 1987.
- Ugnow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. New York: Farrar Straus Giroux, 1993.
- Walpole, Horace. *The Castle of Otranto: A Gothic Story*. [1765] London: Oxford UP, 1964.
- _____. *The Castle of Otranto*. [1765] London: Penguin, 2001.
- Weyant, Nancy S. *Elizabeth Gaskell: An Annotated Guide to English Language Sources, 1992-2001*. Lanham, Scarecrow, 2004.

(お茶の水女子大学大学院博士課程)

Abstract

The Influence of the Sin of the Father in Gaskell's Gothic Tales

Mitsuki EZAWA

Since the very beginning of the gothic tradition, the sin of the Father has been a recurrent theme, and Elizabeth Gaskell's gothic short stories are no exception. Before examining her works, I will overview the historical background of this theme.

With Walpole's *The Castle of Otranto* (1765), the deadly and inevitable sin of the Father visits his son Manfred, and so he is doomed to ruin by his ancestral sin. It recurs as a theme in the later gothic works. In Godwin's *Caleb Williams* (1794), however, the Father's sin seems to retreat from the foreground of the novel, and the main interest changes into the repetition of violence itself. Caleb, who is convinced of the concealed murder committed by his master, Falkland, becomes the object of Falkland's unrelenting pursuit, and his very escape accelerates his master's violence.

Under the influence of this tradition, Gaskell sheds a new light on the established literary leitmotif of the sin of the Father by introducing a Mother as his double. Before exploring it in her stories, Gaskell refers to *Caleb Williams* in the story "Disappearances" (1851) and pays attention to Falkland's invaded privacy. It seems to me that Gaskell regards Caleb as violent Falkland's double because he also resorts to violence toward his master by invading his privacy and in doing so, reveals his Father's sin.

Like *Caleb Williams*, Gaskell's Mother figure sometimes becomes the double of a violent Father, and this article is mainly concerned with this feature in the following three works: "The Old Nurse's Story" (1852), "The Poor Clare" (1856), and "The Grey Woman" (1861). In these stories, the Mothers' involvement in the Father's violence causes a disastrous result on their daughters, as if it were a Mother's sin visiting her children. I call this the sin of the Mother in this article, and my point is that in doing so, Gaskell makes it the female version of the sin of the Father. However, the particular difference from its original exists in its power vector concerning violence: In Gaskell's stories, the example

of the Father's sin accelerates the repetition of violence by concealing his sin, whereas the Mother's sin decelerates and reduces it by revealing her sin by confession.

Therefore, by exploring the sin of the Mother in her gothic tales, Gaskell wishes for a better world, a society less prone to or without violence, instead of reinforcing the idea of a society filled with violence, like the one that is deeply rooted in the stories where the Father's sin is central.